

明治国家を背負った伊藤博文

現実を見抜く感覚の持ち主だった伊藤は
明治国家を背負って活躍した。

●感銘与えた「日の丸演説」

長州藩出身の伊藤博文は、明治維新のリーダーで「維新の三傑」といわれた西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允らのあとをつぎ、明治の終わり近くまで日本国家を指導した政治家です。伊藤は初代首相で、山県有朋らとともに、憲法制定、国会開設、条約改正を進め、日清、日露の戦争を戦い抜きました。

伊藤博文は武士の中でもっとも身分の低い足輕の家に生まれました。吉田松陰の松下村塾で学び、「周旋の才（政治能力）」を認められました。伊藤は討幕運動の最中に数人の仲間とイギリスに渡航し、早くから攘夷が無謀であることを知り抜いていました。維新で明治新政府になると、実力者の大久保利通に才能や見識を認められ、32歳で参議兼工部卿（工部大臣）になりました。

1871（明治4）年、欧米諸国を視察するため岩倉使節団が派遣されたとき、伊藤は副使に任命されました。最初の上陸地、アメリカのサンフランシスコで伊藤は代表して英語で演説しました。その中で、半年前の廃藩置県について「数百年つづいたわが国の封建制度は、一発の弾丸も放たず、一滴の血も流さずに撤廃された。こんな国が世界にあらうか」と胸を張りました。

さらに国旗日の丸を指し「あの赤い丸は今まさに昇ろうとする太陽を象徴し、日本が欧米文明のただ中に向かって躍進する印であります」と述べ、大きな拍手をあげました。「日の丸演説」と言われています。

●常に現実的判断貫く

伊藤は憲法制定にあたっては、多くの反対をおし切って議会重視の立憲君主制の方針を貫きました。また日清・日露両戦争にあたっては常に現実的な判断をしました。日清戦争では「勝ちすぎてはいけない」と言って、北京の手前で軍をとめました。日露戦争開戦直後には、側近でアメリカのセオドア・ルーズベルト大統領と親しい金子堅太郎をアメリカに派遣し、後に米国の仲介による講和への道を開きました。ロシアと長くは戦えない、と判断したからです。

韓国併合にも慎重でしたが、併合前の韓国統監府で初代統監をつとめたことから、日本の朝鮮支配の象徴的人物とみなされ、1909（明治42）年、大韓帝国の民族運動家によって暗殺されました。生涯、伊藤の行動を支えていたのは「日本という国家を思う心」でした。



ベルリンで憲法調査の時期の伊藤博文
（山口県光市・伊藤公資料館蔵）